

武蔵野年頭日曜聖書講筵

わが歎び

――詩篇第16篇――

1972年1月9日

小池辰雄

カイノス あなたに逃げ隠れる 善福 地上の聖者 主はわが嗣業 夢の中で示される 愛せ
られたる者 わたしを陰府に捨ておかず 福音的神秘 人生の究極目的 無の実存

【詩篇16】

ダビデのミクタムの歌

1 神よ、わたしをお守りください。

わたしはあなたに寄り頼みます。

2 わたしは主に言う、「あなたはわたしの主、

あなたのほかにわたしの幸はない」と。

3 地にある聖徒は、

すべてわたしの喜ぶすぐれた人々である。

4 おおよそ、ほかの神を選ぶ者は悲しみを増す。

わたしは彼らのささげる血の灌祭を注がず、

その名を口になえることをしない。

5 主はわたしの嗣業、またわたしの杯にうくべきもの。

あなたはわたしの分け前を守られる。

6 測りなわは、わたしのために好ましい所に落ちた。

まことにわたしは良い嗣業を得た。

7 わたしにさとしをさすけられる主をほめまつる。

夜はまた、わたしの心がわたしを教える。

8 わたしは常に主をわたしの前に置く。

主がわたしの右にいますゆえ、

わたしは動かされることはない。

9 このゆえに、わたしの心は楽しみ、わたしの魂は喜ぶ。

わたしの身もまた安らかである。

10 あなたはわたしを陰府に捨ておかれず、

あなたの聖者に墓を見させられないからである。



「あなたはいのちの道をわたしに示される。

あなたの前には満ちあふれる喜びがあり、

あなたの右には、とこしえにもろもろの楽しみがある。

●カインス

今日は新年の第一回の集会なので、詩篇第16篇をいたします。たいてい、第一回は詩篇をやってきたわけですが。皆さんから年賀状をいただきまして、ありがとうございました。今年は五百枚近くきってしまったものですから、返事がとてもやりきれないので、皆さんのはたいてい失礼したと思いますが。

ギリシア語で「新しい」という言葉に二通りありまして、「カインス」と「ネオス」という言葉です。「カインス」という言葉の方がはるかに多く出て、「ネオス」というのは少ない。「新しい葡萄酒がどうのこうの」という、ああいふ言い方ときは、「ネオス」という言葉が使っている。

しかし、質的に新たなるもの、質的に新しいという――新約聖書が

「カイナー・ディアテケー」「新しい契約」

ですから――そういう意味において、聖書的に福音的な新しきというのがこの「カインス」の方なんです。流行は「ネオス」です。女の方がしゅっちゅういろいろ流行をやってますが。そうすると、また元に戻ったりする。しかし、我々はこの「カインス」の世界に生きている。もちろん、新年というのは、ある意味において「ネオス」でありまして、また古びてしまうけれども、我々は「ネオス」を「カインス」をもつて被^{おお}つていかなくはいかん。そういうことで、私たちにとつてはこの新年というものは、何らかの意味において我々が質的な新しい展開をしていくわけです。

私はこのあいだ、学校の始業式のためにドイツ語の字引を一冊持つて壇上に上がった。

「君たちに、『この新年から毎日新しい単語を五つ覚えろ。それから、単文を一つ

覚えていけ』――もちろん、それは忘れたって構わない――と約束したが、やっているかね」

と言ったわけです。私は正直、ドイツ語の字引を2頁ずつ読んでいる。そして一年間で全部読んでしまう。それは私みたいな専門家ですから、字引2頁を読むのはそう大したことではない。学生諸君にはちよつと無理ですけども。2頁ずつ読んでいくと、一年間でドイツ語の字引を全部読んでしまう。大事なものはだいたい頭に入ってしまう。私は忘れる方も名人ですけども。

とにかく、何か自分は、今年は新しいことをひとつやっていこうと。もちろん聖書のこと、君たちは元日から、どこから読み始めたかとも思うのだけれども。無理なことをすることはない。実行のできることをやっていく。私なんかもしよっちゅうそれを企画しては途



中で止めてしまったチャンピオンですけれども。しかし、だんだんそれから抜けつつあるようなわけだと思っております。とにかく、自分が自分らしい新しいことをやっていくということは、やはり生活に力が入ってくる。どうぞ、皆さん、もし元日からやっていなかったならば、やってください。

●あなたに逃げ隠れる

詩篇16篇は、「ダビデのミクタムの歌」というのですが、「ミクタム」とはどういう意味だか、結局、学者の結論も出てこない。私の以前の訳では「秘詩」と訳してあるけれども、果たしてそれが当たっているかは学問的には請けあえません。内容からいうと、正に「秘詩」と言いたいような秘伝的な、心の中に深く神秘的におさめておきたいような、そういう詩篇です。しかし、これは石版に刻んであったのではないかという説もあるそうです。「石版の歌」というようなことに解釈する人もあるようですが、それもまたおもしろいと思います。

「神よ、わたしをお守りください。」

わたしはあなたに寄り頼みます。

という口語訳ですけれども、全然弱いんです。一番先に、

「我を守り給え、神よ」

と。「神」という字はの場合特に「エール」という言葉が使っている。普通の「エロヒーム」ではなくて、「エール」です。「エール」という言い方はカナン民族が――広い意味におけるセム民族です――神のことを「エール」と言った。学者はすぐそういう言葉遣いからして考えて、

「これは背景としては、カナンに定住した後の、かなり農耕的な要素が加わってきた場におけるところの歌であって、なにもダビデが歌ったのではない。遊牧からむしろ農耕の状態に入って安らかになった、そういった背景ではないか」

というようなことを言うわけです。

「守り給え、我を」

と。ヘブライ語というのは非常に簡単で、「シヤメーレーニー」というただ一字ですけれども。

「私はあなたに寄り頼みます」

という「寄り頼む」という訳はかなり意識的になってしまっているので、もつとはつきりと言うと、「ハッサツ」という字は

「そこを隠れ所として逃げ込む」

という字なんです。

「私はあなたの中に逃げ込みました」

と。あるいは、「逃げ込みます」ということ。

「エホバはわが避所なり」



とありますね。あの「避所」と同じ字です。神を避所とする、隠れ場とする。ちよつと前の14篇の中にもある。6節に、

「しかし、主は彼の避所である」

という言葉がある。それは、カナンに來ましても、外敵もまだ残っているわけでしょうから。「あなたに逃げ隠れる」という。この神という城だけは不落の城であつて、その中に私たちは入れば、どんな敵に対しても防ぐことができる。「逃れの町」なんていうのもある。ああいうのと似たような概念です。出エジプト記21章12節に、

「¹²人を撃つて死なせた者は、必ず殺されなければならない。¹³しかし、人がたくむことをしないのに、神が彼の手に人をわたされることがある時は、わたしはあなたのために一つの所を定めよう。彼はその所へのがれることができる。」(出エジプト21・12・13)

「逃れの町、逃れの場所」というものがある。教会の中に逃げていくと、それで捕まらなということがヨーロッパではあるわけです。そういった意味において、神さまが避所である。避所に行くのが即ち、「寄り頼む」という意味です。「寄り頼む」というと、観念的になつてしまうので、

「避所の中に自分を投げ入れる」

ということですよ。

●善福

²わたしは主に言う、「あなたはわたしの主、

あなたのほかにわたしの幸はない」と。

これは非常に力強い言葉です。「わたしは主に言う」という言い方は、「あなたは主に言った」という、「アーマルト」という女性二人称の形なんです。「アーマルティ」と言えば、「わたしは言う」ということになるけれども、「アーマルト」というと、「汝は」といって女性なんです。何が女性かという、私たちは自分の心や魂にむかつて「汝は」という言い方をする。「我々は自分に打ち勝つ」とか言う。即ち、自分の魂に対して、

「汝はヤーヴェーにこう言っているのだ」

と、もし原文通りなら、そうとらなければならぬようなところです。即ち、自分の中で自分というものを二つにしてもものを言う。

「己に打ち勝つ」

と言つたつて、己に打ち勝つ者は一体何かというと、やはり己なんです。その己がそういった内なる我と外なる我と二つになつて、即ち自分の魂に向かつて

「お前はヤーヴェーに言う」

というわけです。



「アドナイ アッター」

「汝はわが主である」

と。「わが主」という、この場合も特に「アドナイ」と言つて先にもつてきて強くでているのは、

「私の主人だ」

ということ。「魂」は女性だから、「妻」というほどの意味ではないでしょうけれども、まあ、そういったわけで、「汝はわが主である」という。

「わが幸いは汝の他にない」

と。「汝の他にない」というのは、もし直訳すれば、「汝を越えてはない」というようなことです。「汝を越えては他にない」と。

「幸い」という字は、旧約では「トーブ」という字を使っている場合が多い。「善」という字です。だからむしろ、「善福」なんです。「福」の字を入れて、「善福」と訳したら、ちょうど「トーブ」にあたる。前に私は自分の解説ではこの16篇を「至高善、最高善」なんていう表題で書きましたけれども、善福ということですよ。日本語というのは昔はよく、漢字にルビをふつて、「善福」と書いて、読みは「さいわい」であるが中身は「善福」であるという。昔の文章は、目で読むときには非常に渾然とくる。今はルビをあまり付けないから、「善福」と書かれると「ぜんぷく」と読んでしまうからおもしろくない。そういう、日本語というのはちょっと困った言葉です。

これはこの句を見ると、すぐ思い出すのが詩篇73篇25節です。これはもう暗記している。

「わたしはあなたのほかに、だれを天にもち得よう。地にはあなたのほかに慕

うものはない」(詩篇73・25)

天にも地にもただ汝のみだと。我々にとって、「あなた」はキリストです。

「天にも地にもただキリストだけがわが追求するもの、慕うものである」

と。それと正に姉妹篇的な言葉です。

「あなたはわたしの主、あなたの他にわたしの幸いはない」

こういう言葉を読むと、すぐ神学者は、

「これは幸福主義だ」

なんて言う。主義としての幸福主義なんていうものはもちろん批判されるべきものです。「主義」「イズム」として幸福を追求することが人生の目的であつたら、これは批判されなければならぬ。また、御利益宗教が幸福主義だからね。ただ自分のこの世的な幸福や繁栄や名誉や財産や、そういうものを求めているようなのが幸福主義です。我々の感覚は――感覚と言つてはおかしいけれども――先験的な判断というものは究極でないということが分かる。そうでない、究極的でないということが分からない人もずいぶんいるけれどもね。

ヒルティが「幸福論」「グリュック」と言つたが、ヒルティはもちろん幸福を主義として



幸福論を書いているのではない。

「こういう在り方をしていれば、その事態は幸いである」

という意味での幸福論なのであって、「幸福をこういうようにして追求しよう」といったような論文ではない。そこが、「幸福論」なんていう表題を出すと、へたすると誤解される。

誰でも幸福は願う。だから、年賀状には、「ご多幸」だとか、「ご多祥」なんて書く。私もちよつと書いたりした(笑)。本当はあんなことは書かない方がいい。まあ、仕方がない。相手がこの世的な人だから、ちよつと書くんだけれども。「祈る」と私は書いたら、偽りにならないように、必ずその瞬間にちよつと目をつぶって祈ります。それで祈らなかつたら、祈つていやしない。ところが、祈らない祈りがたくさんあるらしい。とにかく、どういうことでも偽っていると、生活に力が出なくなる。私はそれを自分で体験しているから知っている。本式なことをやっていれば必ず力が出てくるし、いい加減なことをやっていればダメなんだ。

しかし、この場合の、

「なんじはわが幸いである。あなたのほかに幸いはない」

ということの意味は、善福ということです。幸いと善とが一つである。わが善であることが同時に、幸いであるという花が咲くという話です。なにもこれを幸福主義であると言つて批判することはひとつもない。

「あなたを本当に自分の幸いにする、善福とする」

ということとは、さっきの詩篇73篇25節と同じように、いろいろな幸いな状態はあつても、神と一つになって、神の中に自分を投げ込んでいるときの、その状態ほど善福さいわいなるさいわいな状態は実はない。他の幸いは滅びていくかもしれないけれども、この善福は滅びないところのさいわいである。

●地上の聖者

³地にある聖徒は、

すべてわたしの喜ぶすぐれた人々である。

この3節は困ったものだ。この詩篇を読んでいて、こここのところにくると、ちよつと、この3節が浮いてしまう。何だつて、このところで、「聖徒はすべてわたしの喜ぶすぐれた人々である」なんてことをいきなり3節に持つてきて、

⁴おおよそ、ほかの神を選ぶ者は悲しみを増す。

なんて言うのか、何かそこところがちぐはぐです。ここは註解者が、ある意味において匙を投げるような、註解の十字架というところです。私はそこで苦し紛れに前にはこんなことを書いた。

「この地にある聖徒については彼らはまた優れたる者ゆえ、彼らにわがすべての喜



びがある」

なんてね。けれども、もちろんこれは原文がかなり傷んでいるので困ってしまうわけです。それでいろんな読み方をする。私が持っている詩篇の註解もかれこれ十種類くらいありますけれども、そんなのをいちいち調べてやっていたら大変な話です。

「聖徒」という言い方はむしろ反語的に、今の「マソラ本文」ではやはり、「カードーシュ」「聖なる」という字が使ってあって、「ケドシーム」とあるから「聖者たち」ということなんですけれども、あとの10節に出てくる「聖者」という言葉と違うんです。「ケドシーム」というと、これは「聖別されたもの」ということで、この場合は非常に皮肉に使ってある。即ち、この「地にある聖者」というのは、「地上の聖者」というわけで、地上の神々、多神を――ヤーヴェーは天上の神であるが、人間の造った地上の偶像神がいるでしょ――偶像神たちを彼らは非常に神聖と思つて拝んでいるのだが、「そんなものは」と言つて、これは反語的に使つたという。私は註解の一部をみて、そう解釈するのがかえっていいのではないかと思ひはじめているわけです。

「地にあるところのいわゆる多神の神々、偶像的神々は」

と。そうすると、「すべてわたしの喜ぶすぐれた人々」というのは全然違う。これは、

「私はそういうものをおつて喜んだこともある。けれども、そういういたものから、すぐれた」という字はむしろ「強い」という字です。

そいつはかつてはなかなか幅をきかせた強いものであったが、自分はもうそういうもののからぬけてしまったんだ」

と。即ち、この人はヤーヴェー信仰に本当に新しく入ったものだから、もう過去のそういった神々に対する信仰から抜けてしまったというわけです。だから、

4 おおよそ、ほかの神を選ぶ者は悲しみを増す。

わたしは彼らのささげる血のかんさい滙祭を注がず、

その名を口となえることをしない。

と言つて、

「過去から清算して、自分はヤーヴェー信仰に新たに突入した」

と――正にこの新たは「ネオス」ではなくて「カイノス」の新たです――見るかなり新しい学者の説ですが、これはなかなか結構なことだと思う。そういう読み方をしたいわけですが、そうするとそのあとはすぐ分かる。偶像、モロクに犠牲を献げたりなんかするようなことからはもう自分とはつきりと違つたんだと。まあ、そこまで読んでいいかどうか知りませんが、その新説もなかなかかえつてこのところでスーッとくるのではないかと思うわけですね。そういうように、「カドシーム」というものを、「カードーシュ」「聖」という言葉をまた全く別な意味に、もつといかがわしい意味に使う場合もある。



●主はわが嗣業

5 主はわたしの嗣業、またわたしの杯にうくべきもの。

あなたはわたしの分け前を守られる。

これも訳が弱い。

「主はわが嗣業、またわれに酒杯を与える」

「わが酒杯の分け前である」と私は訳しましたが、訳し方は少し違たつて同じことです、大同小異です。

「ヤーヴェーこそはわが嗣業であり、わが酒杯の分け前である」

「わが酒杯の分け前である」というのは、「われに酒杯を与えた」ということで、むしろ、「わが酒杯の分け前」と訳した方がそのままいいと私は思う。即ち、

「主がわが嗣業であり酒杯である」

ということです。

「あなたはわたしの分け前を守られる」ではいかんで、

「私の分け前をしつかりと掌握しておられる」

ということ。あるいは、「くじを引いた」という訳し方もある。私は前に、「運命を支えた」と言いましたけれども、もつと具体的に「くじを引いた」という訳し方がある。

申命記10章9節に、

「そのためレビは兄弟たちと一緒に分け前がなく、嗣業もない。あなたの神、

主が彼に言われたとおり、主みずからが彼の嗣業であつた。」(申命記10・9)

とあるでしょ。これは大事なところ。レビ人というのは神殿で祭儀をつかさどる連中です。彼らは、他の者にはみんな分け前があるんだが、分け前がない。献げられたものをいただく。

「レビ人というものは、主自身が嗣業である」

というような角度の言い方をもう既に申命記にしてある。「主はわたしの嗣業」と言う。分け前である。

向こうでは石の標識を立てては、お互いに分け前を、「ここまではお前のものだが、こっちは俺のものだ」と言つて分ける。今、土地の分配を日本でもやはりそういうようにやっているようですけれども。それと、測り縄ですね。縄を張つて測る。同じようなことがやはりカナンでもなされていたとみえます。今でも何か風習がどこかで残っているらしい。

そういった分け前を他のものたちは、他の部族たちにはもらうけれども、しかし、自分は主だけだ。これは、この人がレビ人というのではない。

「たとえばレビ人のごとくに、自分にとっては、主は私のゆずりである。私の杯である。わが酒杯である」

ということです。また、「我は主の酒杯である」という言い方も、詩篇23篇ならむしろそつ



ちになりますけれども。

「まことに私はよい嗣業を得た。ゆずりを得た」

と。「分け前を得た」ということですよ。

ヨシユア記14章をみると、

「イスラエルの人々が、カナン之地で受けた嗣業の地は、次のとおりである。すなわち、祭司エレアザル、ヌンの子ヨシユア、およびイスラエルの人々の部族の首長たちが、これを彼らに分ち、²主がモーセによって命じられたように、くじによって、

ここに「くじによつて」と書いてあるでしょ。

これを九つの部族と、半ばの部族とに、嗣業として与えた。³これはヨルダンの向こう側で、モーセがすでに他の二つの部族と、半ばの部族とに、嗣業を与えていたからである。ただしレビびとには、彼らの中で嗣業を与えず、⁴ヨセフの子孫が、マナセと、エフライムの二つの部族となったからである。レビびとには土地の分け前を与えず、ただ、その住むべき町々および、家畜と持ち物とを置くための放牧地を与えたばかりであった。」(ヨシユア14:1-4)

そういうように、カナン侵入のあとで、部族によっていろいろ分け前があったわけですが、ところが、レビには分け前がなくて、レビにとつてはヤーヴェーが即ち嗣業である。

ウィルヘルム・シラーに「地上の分割」という詩がある。いろんな王者とか商人とか大工とか、いろんな人がゼウスの神さまにそれぞれ分け前をもらうけれども、あとから遅れて来た者がある。これは詩人であった。そして、何かもらおうと思っただけでも、もう何もない。地上に分け前がなくて、

「詩人というものは私のところに来い。

即ちそこは天界、霊界です。

お前の領域は霊界である」

という意味の詩句がある。詩人は天界というものを自分の魂の領域にして動いているものだ。そこで本当に喜びと安らいがあるんだというような意味の詩があります。

我々クリスチャンにとつては、「国籍は天にあり」で、自分たちは地上にありながら、もはや古びざるところの天界を自分たちの本当の魂の住処^{すみか}として、魂の腰をすえて動いている。これが私たちにとつての分け前です。いや実に、もうひとつ言ってしまうと、パウロが言っているとおりの、

「万物を我らに賜らざらんや」

というわけで、分け前が全然ないのが、実は万物が分け前である。

「神を持つもの、キリストを持つものは全てを持っているんだ」と、そういうことになるわけです。



●夢の中で示される

6 測りなわは、わたしのために好ましい所に落ちた。

まことにわたしは良い^{しきょう}嗣業を得た。

正にさつきから言っているとおりの「測りなわ」です。「良い地に落ちた」と言っているのは比喩的な言い方なので、実は天界に測りなわが落ちたわけです。

7 わたしにさとしをささずけられる主をほめまつる。

夜はまた、わたしの心がわたしを教える。

「私に諭し^{さと}給うエホバを讃めまつろう。また、夜々^{よなよな}わが腎^{むらと}は私に教える」

と。「腎^{むらと}」と私は訳しましたが、この「心」という字は「腎臓」という字なんです。五臓六腑の中でこの腎というのは非常に深い心情の世界です。祈りの一番深いところで、夜寝るときに祈って寝る。そうすると、我々の普通の意識の奥の世界で祈りが聴かれて、何か知らんけれども、夢の中で示されるということは、私なんかもちよこちよこある。

私は実は初夢は、いわゆる夢はみなかつたけれども、実はその初夢の中で、ある不思議な境地に入った。神秘境みたいだね。そういうようなのがやはり、いわゆる夢ではないけれども、即ち、「夜、腎^{むらと}が私に教える」という、腎の世界で神さまの示しが与えられて教えられるということになるわけです。祈り心で一切を託して寝ることが非常に大事なことです。

8 わたしは常に主をわたしの前に置く。

主がわたしの右にいますゆえ、

わたしは動かされることはない。

「私はヤーヴェーを自分の前に置いた」

という言い方をしてある。「常に神さまを私の前に置いた」と、ずいぶん乱暴な言い方をしている。普通ならば、「自分を神さまの前に」という言い方をする。「コラム・デイ」「神の前に」というのは、カルビンの言い方ですけれども、「主を自分の前に置いた」と、非常に大胆な表現です。自分は動かされることはない。

9 このゆえに、わたしの心は楽しみ、わたしの魂は喜ぶ。

わたしの身もまた安らかである。

いつもヘブライ語は対句的ですから、「心」と言う今度は「魂」と言ったり、「楽しむ」と言う「喜ぶ」と言ってみたりする。そして、さらに加えて第二のものにきて、「私の身^{からだ}もまた平安である」という。「平安」と今私は言いましたけれども、これは「シャーローーム」という字ではない。「ベータツハ」という字で「安全の中に住まっている」という言い方です。

「私の身体もまた安泰の中に坐りこんでいる」

というような言い方です。



●愛せられたる者

10 あなたはわたしを陰府よみに捨ておかれず、

あなたの聖者に墓を見させられないからである。

大体、旧約では魂は陰府にいくことが常識的になっていたわけです。ところが、この16篇にいきなり10節のような、

「陰府に捨ておかない。あなたの聖者に墓を見させられない」

と、非常に飛躍的なことが出てくる。これはある意味において飛躍はあってもいいと思う。この場合の、「聖者」「ハッシデーム」と言い方は――「ヘセッド」というのは「愛する」という字ですから――「愛せられたる者」ということです。よく「聖者」と訳してあるけれども、「聖」という概念よりか、「愛せられたる者」ということで、神に愛せられたる者です。

「神われらを愛す」

とヨハネ書簡にもあるとおり、私たちはキリストに在って神に愛される。「愛される」ということは「救われた」ということ。神に救われた者。神の愛は私たちを救うんです。我々にしてもそうです。人を愛するとはただ感情的に愛するのではなくて、その人を救いあげる、担いあげることが本当の愛です。

私は高等学校の生徒に西郷南洲の「敬天愛人」という言葉を語った。

「愛人」というと、何か人を愛するという感情的なことに思ってはダメだ。君たちは友人がたくさんいるだろう。フレンドシップ、即ち友情をもつて互いに助け合うこと。困っているときに相手を助けることが、それが愛するということだ。いろいろな意味で具体的に助けていく。それが愛することなんだ」

と言ってやりました。「敬天」というのはただ敬っているのではなくて、本当に平伏して信賴する、身を投げかけていくのが本当の「敬」です。「敬けい仰ぎやう」という言葉がある。仏教の方にいい言葉があったな。「敬順しん」、敬し順したがうという。

あの「南無阿弥陀仏」という「南無」という字は、「ナマス」という言葉からくるそうです。「ナマス」というのは、私は梵語は知りませんが、帰順、合一すること。これが「南無」という。だから、「南無」という字は素晴らしい。阿弥陀あみだに帰命きみんすることだね。帰命帰一する。いつも我々が言っているところの、

「キリストの中に自分を投入する」

ことです。投入することが帰命ですから。そのもとに帰る。帰一する。合一する。帰順する。あるいは、帰依するという言葉がある。「絶対帰依の感情」なんていうが、あれは単なる感情だけではダメですけども。帰るということ。原始に帰る。原始の福音に帰る。帰依する。みんないい言葉です。



●わたしを陰府に捨ておかず

要するに、16篇はそれを非常に語っているわけです。なぜ、心が楽しんだり、魂が喜んだり、身体も安らかであるかというとな、

「汝の中に自分は逃げ込んでしまったから、駆け込んでしまったから、投入したから。汝は私のゆずりであるから、汝は私の酒杯さかずきであるから」

と。そういう神との非常な合一の世界です。そういった永遠的なもの凄い存在と一つになりますから、今までの既成概念の「陰府にいく」なんていうことがどこかにいつてしまうわけです。そこで、「あなたはわたしを陰府に捨ておかず」という。

「こんなに現実にあなたと一つであるならば、陰府にいくはずはない。あなたに愛せられた者を墓の中に入れておくはずはないんだ」

というようなひとつの飛躍が出てきた。ヨブ記の中にも時々、飛躍が出てきます。それがやはり新約への預言的な光になっている。

実はこの16篇10節をペテロが引用したわけです。使徒行伝2章25節に、

「²⁵ダビデ彼につきて言う「われ常に我が前に主を見たり、我が動かされぬ為に我が右に在いませばなり。²⁶この故に我が心は楽しみ、我が舌は喜べり、且わが肉体もまた望みの中に宿らん。²⁷汝わが靈魂を黄泉よみに棄て置かず、

はい、ここです。

汝の聖者の朽ち果つることを許し給わざればなり。²⁸汝は生命の道を我に示し給えり、

これも11節に書いてあるでしょ。

御顔の前にて我に歓喜を満たし給わん」(使徒2・25、28)

と。即ち、ペテロが語っているこの数節は正に詩篇16篇がここに出てきている。ペテロはそれを意識して言ったらしい。そこで16篇を「ペンテコステの歌」と言う人もあるわけです。そのように、ペテロがペンテコステの体験のあとで語っているその事態を、詩篇16篇をもつて引用しながら言っているということは、非常に深い内容的な連関が考えられるわけです。ペンテコステの事態は正に神の事態が臨んで、キリストの霊が臨んで、キリストの中に本当に帰命しているわけですよ。帰命合一している世界です。それが即ち本当の歓びの世界であり、本当に善福さいわいの世界である。そこで、イエス・キリストの魅りがいかにその事態と相符合するか。使徒行伝2章と13章に出ているわけですけども、その意味において、我々は古びざるところの「新た」という、「新しさ」ということです。

●福音的神秘

人間というのは、歓びの気持の伴わないものはやはり本ものでないわけです。始めは、それは苦しくたっていいですよ。けれども、やっているうちに、必ずそれが本当になつてくると、



歓喜、歓びというものが自然に湧いてくる。自分を投げ出していくときにはまだ歓びでないかもしれないけれども、私たちはキリストにあるがままの自分を投げ出して、キリストと一つにされる。もちろん、それは、いつも申し上げているとおり、十字架を通じてであります。旧約ではそこまでは行けない。けれども、その十字架の贖いによつて、おそれなくキリストと一つになるというこの恩寵の世界、そこには本当の^{さいわい}帰命、^{さいわい}帰一がある。

この帰命帰一を、そういった合一の神秘の世界をなにも避けることはしないですよ。いわゆる神秘主義は批判されるべき面を持つていなければならないけれども、福音的な神秘というものは――パウロが言っているところの神秘はこの福音的、神秘です――この福音的、神秘がなかったら、その信仰はむしろ本ものではない。

「我を視よ」

とヨハネやペテロが言っているその「我を視よ」というのは、

「わがうちなるキリストを視よ」

というこの福音的、神秘、合一の世界です。これは贖いを通しての世界であつて、ただ祈り三昧で何か神と合一になったというのとは違う。その点ははっきりしておいてもらわないといけない。よく、神秘主義的な傾向を批判する連中はいつもそこで、ある躰きをしているわけです。また逆に、本当に福音の構造を受けとらないで、ただ霊的なものは――他の宗教でも霊的な面がありますから――それと、酒に酔つたような、神に酔つていよう、そういうった歓喜というものは――またそれを大いに強調するような人たちも無きにしもあらず――どつちも間違いです。

だから、何といつても、パウロの福音の構造は健全なんです。パウロのような構造をしつかり踏まえながら――しかもそれは頭でただ構造を見ているのではなくて、その福音的、神秘の帰入の世界でキリストと一つという――使徒たちの本当の信仰の現実の中に入ると、これはもう自在ですから、非常に豊かな内容になってくるし、はつきりとした認識も出てくるし、主義主張やいろいろなものに対する正しい認識と限界とが見えてくる。そういうたような意味におけるところの深い福音的、神秘に入らなくてはダメです。

●人生の究極目的

それを新約の角度から私たちが詩篇16篇を読むときに、

「本当にわが歓び、わが一切である。酒杯である。汝他に嗣業はない」

ということとは、大胆にその世界に入らなくてはダメです。それはもちろん、「汝」はこの場合キリストです。ヤーヴェーではない。16篇において相手を本当にキリストとして私たちはその歓びの中に入る。そこは本当に善福の世界です。

ところが、もう一つ言いたいことは、この善福の状況で終わつてはダメである。福音は、では何が本当に善福かと言うと、



「人を善福にしていこう、人を本当に救いあげていこう」

です。キリストが、「幸いなるかな」と山上の垂訓で言われる角度は、ただキリストの中に帰入していることだけを言っているのではない。逆に、福音のために十字架を負い、人を救っていく。そのためには地上ではどんな惨憺たる姿でもかまわない。しかしながら、その奥に本当にキリストと一つになって、そして、相手に天国を与えていく。即ち、天国体であるということは、回りに天国を展開していく。だから、回りに天国を展開していく人、担い上げていく人、救い上げていく在り方が究極における幸いです、もし幸いというなら。本当の「幸いなるかな」というのは、人を幸い成らしめる者が幸いなる者です。自分がただ幸いとか何とかいうのではない。キリストと一つであるということは、幸いを求めていることではなくて、そこが幸いの事態であって、人を幸いならしめていく。生命を与えていく。与えられたら、生命を与えていく。歎びに満ちたら、人を喜ばしていく。みなこれが即ち、受けとつていけばこれを与えていく。神さまのものを私したら、どんなに善き神さまのものでも、それを私したらダメになる。これが人生の究極です。ゲーテも最後のところはそこを言っている。

「人を幸いならしめるところの行為（ヴォールタート）が人生の究極の目的である」というのは、その意味において正しい。

ただ「信じている」ということでもない。やはり、そうなったら、「愛する」ということなんです。愛するとは、申し上げているとおり、担うことである。

「愛するとは十字架を負うこと」

である。これが本当の究極のものです。これは詩篇16篇からはそこまで出てきませんけれども。

「天上天下なんじのほかにも慕うものなし」

と言ったところは土台だけでも、そうしたらば、必ず人を幸いならしめるところのものに展開していかなければ、それでお終いだったら、いわゆる神秘主義になってしまう。それは人生の幸福ではない。そうすると、三昧になってただ祈りこんでしまつて、

「私はもう世の中のことはどうでもいい」

なんて、妙なのが時々いるよ。あんなようなことになって、人の言うことを聞かないで、

「お示し、お示し」

なんて言ってお示しばっかりでね、そういうようなのはダメです。むしろ、何ものでもないようなのがいい。

●無の実存

そこがやはり無の実存なんです。自分は本当にバカに撒けている。やはり、キリストの姿を見ていると、そうです。何と言つても、キリストの姿を見ていると、キリストは神と



の三昧にただ酔っていましたか。そうじゃない。キリストは神の中に酔っていたひとですが、本当に神の中に、神の懷にあつたひとが実は、あらゆる人を救いあげていこうとした。サタンはやつつける。そういうのが、本当の「幸いなるかな」の姿です。

ある時は、その人は泣かなければならないかもしれない。ある時は、ただひとり迫害されなければならないかもしれない。どうでもいいよ、その状態は。とにかくしかし、そのようにして天国を展開するいろいろな在り方は、一番究極において「幸いなるかな」ということ。これが福音の世界です。

11 あなたはいのちの道をわたしに示される。

あなたの前には満ちあふれる喜びがあり、

あなたの右には、とこしえにもろもろの楽しみがある。

とにかく、詩篇16篇で、

「キリストはわが喜びの一切。他のものとは代えられないのだ」

というところに入つて、キリストを本当に受けとれば――これは旧約からは来ません、新約の世界と担いの愛がなければね――人の嫌がる苦難を自分で背負っていく。それは力があるから、背負えるんだ。それが即ち、人生の究極の、善福さいわいというなら善福だし、至上善というなら至上善です。

まあ、私は16篇を受けとつて、やはり新約の光に照らされると、そこまで言わざるをえないわけです。そういうようなくあいにして、この16篇的な福音的南無の世界に入っていく。これが使徒たちの聖霊の世界なんです。聖霊を本当に受けて、聖霊内住の世界に入ったら、

「この喜びを、この善福さいわいを何ものと代えることができるか。ゆえに、この善福は、

この喜びは、この生命は人に与えないではいられない」

というところが、これが本当の世界です。そのようにして、我々は限りなく展開また展開していく。

福音の証しとは、

「福音とはこういう喜びよろこびである」

と言つて、自分でいばっているような、そんなものではない。福音の証しとは、人を喜ばせることが、人を救いあげることが、人を助けることが証しなんです。16篇ではそこまで言つてませんけれども。それをするためには、16篇的なキリストとの合一の世界に、帰入の世界に本当に入らなければダメです。また、入ったら、自然にそれは展開していく。これをどうぞ、私たちはやつていききたいと思つております。

